

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



San Thein

出身地：ミャンマー・モニワ

所属：ミャンマー農業灌漑省ミャンマー砂糖公社副部長

日本滞在：2005年7月～2006年3月

小さな穴から日本をみると

サン・テイン

二〇〇五年七月に私は日本に来了。成田空港の入国審査カウンターの前で、私のような外国人が長い列を作って並んでいたことに先ず驚いた。それは、全世界の人々が経済大国であるこの島国に、あたかもどつと流れ込んでいるかのような光景だ。私は頻繁に外国を訪れるが、日本に対するこの第一印象にはいささか興奮してしまった。

「日本での滞在中に、更なるショックに出くわすだろうか。日本と私の母国ミャンマーはある程度、東洋文化と信仰を共有しているため、私にはカルチャー・ショックは存在しないのではないか」と自問自答した。だが、ここは高度文明化社会。日本人は男女問わず礼儀正しく、服の着こなしは優れており、しかも外見も良い。だから、私は慎重に振る舞おうと努めたが、それでもかなりのショック、具体的に言えば電化されたオートメーション・システムに対するショックに悩まされてしまった。

来日初日に宿泊先のホテルで、私はロビ―近くの手洗いに行った。そこで水道の蛇口をひねろうとしたが、水は出なかった。何度も何度も試みたが、全く水は出てこない。「何というホテルだ」と思ってしまった。だが暫くして、無意識的に蛇口の下にちょうど手をかざしたところ、水が出てくる

はないか。「なんと私はばかげたことをしていたのだろう」と感じざるを得なくなったのだ。

些細なことかもしれないが、更なる困難が連続して私に降りかかった。日本での滞在中、電車の切符を買ったり、食料雑貨店で食べ物を選んだり、電車に乗って目的地の駅で降りたり、テレビや映画を見たりする際など、日本語が分からないために困ってしまった。また、殆どの設備には自動操作機能があり、(日本語で書かれた)取扱説明書に操作方法が示されていた。そのため、日本語に対する私の無知と天然だけで、いつも何らかの問題が起こった。

日本では、予想以上の物価の高さにも驚いてしまった。小部屋のようなマンスリー・マンションに私は住まざるを得なかったが、私の国で同額の高い家賃を支払えば、少なくとも三つの寝室や備え付けの家具があり、しかも一般的な設備のある二階建ての家を借りられる。だが日本は、母国と比較して人口密度が高く、その環境のなかで高い生活水準を維持しなければならぬため、ここでの物価がそれなりに高いことを私は後で理解できた。つまり、技術的で資本集約的な商品をつくる人々は、労働集約的で単純な商品をつくることには見合わな

い、とも結論づけられると思う。

洗練された生活習慣にも、私は感銘を受けた。毎朝のラッシュアワーでは、乗客が列をつくって順番に並び、電車やバスに乗車するが、無秩序に乗物に突進するのではなく、規則正しく次々と乗車していく。人々が管理、統制されているわけではなく、自分自身のモラルにより行動している。このことは自動車や電車の組立、その他のことにも当てはまっている、と私は確信する。だが、このような前提条件がなければ、高い道徳意識や礼儀正しさは、開発途上国である母国の人々には容易に真似できない、といえるかもしれない。

私は、日本人の民主的な生活を尊重したい。そして、遵法精神が私の国にもあればと願いたい。昨年行われた衆議院選挙の際に、私は一睡もせず一晩中起きてそのテレビ番組を見ていた。テレビの出演者が何を話しているのかまでは分からなかったが、選挙の開票速報、公正で熾烈な競争、集計状況、落選結果を真摯に受け入れた候補者の姿などを熱狂的に見ていた。日本が中立的な寛大さでもって、私の国のような友好国を更に発展させ、民主的で、繁栄した国に導いてくれないだろうか。

(前海外客員研究員／訳＝梶山貴史)